

大学教育学会 課題研究活動報告書 (2021 年度)

提出日 2022 年 3 月 20 日

報告者 山田嘉徳

課題研究テーマ	大学教育における質的研究の可能性
代表者 (所属)	山田嘉徳 (大阪産業大学)
メンバー (所属)	上島洋佑 (桐蔭横浜大学), 森朋子 (桐蔭横浜大学), 山咲博昭 (広島市立大学), 谷美奈 (帝塚山大学), 山路茜 (岩手大学), 西野毅朗 (京都橘大学), 服部憲児 (京都大学)
担当理事	森朋子 (桐蔭横浜大学)
コメンテーター (所属)	佐藤浩章 (大阪大学)
実施した活動	<p>本課題研究は大学教育を対象とする優れた質的研究の事例収集と質的研究のあり方を探る方法的検討を行うことによって、大学教育における質的研究法の確立に向けた知見の提起を目指すものである。</p> <p>本年度は、(1)初年度に実施した質的調査による成果の公開、(2)大学教育を対象とした質的研究に取り組む際の要点の検討ならびに質的研究による知見の活用可能性についての検討、(3)本学会員を対象とする質的研究法セミナーの開催という3つの活動を実施した。</p> <p>(1)では、2020年10月末から11月初旬にかけて大学1年生から4年生の延べ20名を対象とした『『コロナ禍における学生の学び』の質的調査』をモノグラフとしてとりまとめ、その成果を書籍化した。</p> <p>(2)では、上記の質的調査の方法を振り返ることで、質的研究の要点について議論する機会を設けた。この議論の結果として、<研究デザインの精緻化>、<研究成果の大学教育現場への適用の可能性>、<遠隔によるオンライン調査法の可能性>に関する研究課題が見出された。さらに<有用性>(得られた知見が大学教育の改善や発展に有益であること)の観点から、質的研究で見出される知の活用の前提として、質的研究の達成に必須となる言語的縮約の指針(ミニマリズム)を踏まえたかたちでの、質的研究法の整理のあり方を問う議論の重要性について確認した。</p> <p>(3)では、本学会の大学教育研究力向上委員会が主催する「大学教育研究入門講座」オータムスクール2021の一環として、オンラインによるセミナーを実施した。セミナー後の参加者へのアンケートの結果からは、本学会において質的研究法の研修について一定のニーズが存在することを改めて確認することができた。</p>

<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学教育学会課題研究「大学教育における質的研究の可能性」グループ編著『コロナ禍で学生はどう学んでいたのか—質的研究によって明らかになった実態』ジヤース教育新社 ● 大学教育学会第43回ラウンドテーブル（2021年度6月5日@関西大学オンライン開催）『『コロナ禍における学生の学び』質的調査の振り返りから考える質的研究の要点』 ● 『大学教育学会誌』第43巻第2号〈ラウンドテーブル報告〉山田嘉徳・上島洋佑・山咲博昭・谷美奈・山路茜・西野毅朗・服部憲児（2021）。「ラウンドテーブル報告 大学教育における質的研究の多様な展開」 ● 大学教育学会2021年度課題研究集会課題研究シンポジウムⅡ（2021年度11月28日@芝浦工業大学オンライン開催）「大学教育における質的研究の可能性」 ● 山田嘉徳「大学教育における質的研究の活用可能性—課題研究の経緯とシンポジウムの企画趣旨—」 ● 山田嘉徳・谷美奈・西野毅朗・服部憲児・上島洋佑・山路茜・森朋子「大学教育実践に活用される質的研究のあり方に関する検討」 ● 山田嘉徳・上島洋佑・森朋子「大学教育における質的研究方法の普及に向けた活動—質的研究法セミナーの取組成果を踏まえて—」 ● 佐藤浩章「課題研究『大学教育における質的研究の可能性』コメント」
<p>残された課題</p>	<p>2021年度の活動を通して、大学教育研究における質的研究法を<有用性>の観点から踏まえながら整理するという研究課題が見出された。具体的には、研究の出発点である先行研究の整理において、近年の質的研究をめぐる動向や潮流を踏まえながら、どのような研究が良質な質的研究であるかについて初学者にもわかりやすく提示するなどの実用的な可能性を探っていくことが目下の課題となることが確認された。すなわち、最終年度に残された課題は、実用性を視野に入れた質的研究法のレビューの実施となる。加えて、これから質的研究に取り組もうとする人を対象に、本課題研究で議論してきた質的研究法の有効な手立てなどをめぐる互恵的な学び合いの場をいかにして提供していくのかということも、今後も継続的に検討すべき課題となることが共有された。これらの探究を通して、大学教育における質的研究法の確立に向けた具体的な知見の提起を試みたい。</p>